

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

人の見聞のあらゆる事柄が学問の対象となり得る。仮に火星人学というものを考える。<sup>(注)</sup>バイキング一号・二号が火星まで行き、火星人などいないことを確かめたはずである、いもしない火星人についての学問などあるはずがないと思うのも道理だが、いや火星人学というのは火星人を登場させた小説、風刺漫画、何であれ人々が火星人を話題にしたすべてを取り上げ、火星人についての人々のイメージを対象とする学問であると主張し、その対象の設定と対象へのアプローチの正当な仕方と思われるものを人々に説得できるなら、人々は火星人学という学問が何であるかを理解し、その可能性を承認するに違いない。だが、哲学という学問ではどうか。——輪郭づけて示せる対象がない。

これはどういうことか。学問とは人が何かについて問い、(他の人から学ぶことを含みつつ)答えを得ようとする活動である。その答えは当然ながら当の何かについての知識の資格で求められ、知識からは、問うた人、それから答えるために考えたり観察したり実験を試みたりした人の活動は消えさせられている。或る事柄についての知識とは、その事柄の在るがまま、すなわち人がそれを知ろうと知るまいと無関係にそれ自身として在るがままの発見の内容であり、従って、知識をもたらした人は、それを発見した、知ったという関わり<sup>かか</sup>の後では、知られた事柄だけを自分とは独立のものとして残して知識の中身からは消え去る、こういう建前がある。そうして、様々な学問の対象とは、それについて知識の獲得が目指される相手であり、知ろうとする人の向こう側に位置する何かである。ところが A 哲学では事情が違う。

何かについて問い、答えを得ようとする活動である点で、それは諸学問に通ずる。けれども、哲学では、問う人、答えを得る人が消去されることは決してない。なぜなら、哲学の (ア) イトナみにおいて人は必ずや己との関わりにおいて何かを問うからである。そして、それゆえにまた、哲学では、己とはその何かとだけでなく 諸々の 一切のものと関わって生きている存在である限りで、何かを中心に問いつつ一切を問題にするよう誘われる。対象が限定されないのである。

普通、学問を考えると対象の概念が前面に出て、知る側は成果としての知識から消える、これはどうしてか。或る何か詳し

く知られることが望ましいものがあり、しかも、その知ることは何のために、ということはおいて、知ることそのことが目的である、価値あるという構図が、学問では採用されるからである。

けれども、学問的活動は特殊なもので、私達は普通は知ることを他の事柄に従属させる。一般的にいつて、或る何かについて積極的に知ろうとするのは、そのものへの自分の関わり方をより望ましい方向へ持つていくためである。ここで肝心なのは、私と私が知ろうとする相手との関係を設定するのは私、自分の側だ、ということである。そこで、知りたい対象と、知ろうとする私とを関係づけるものとして主題の概念を導入したい。

様々なものと私との間には、私に可能な諸々の行為の文脈が定める様々な関係があり得る。そして、知ることはいかなるためにという在り方に照らしたとき、その諸関係のどれに私が関心を持つかに従って、どのものが詳しく知られるべきか、またそのものに関してどのような事柄が知られるべきかが決まってくる。前者の決定が対象の指定であり、後者の決定がすなわち主題の設定に他ならない。そして対象は知ろうとするものに向こうに位置するものであるが、主題は知る側の動機なしでは像を結ばない。

**B** たとえば、一つの石について知るとはどういうことだろうか。確かに特定の主題に導かれない知り方というものもありそうではある。大きさ、形、色、重さ、固さを調べる。これは特定の誰かの特定の関心によつて規定される前に、客観的でオーソドックスな知ることのように思える。だが、これは次のような事情によるものでしかない。つまり、対象がそれについて知られるべき当のものとして己を提示するために必要な最低限の出発点をなす事柄があり、物が問題である場合、普通は知覚が物を提示するという事情である。実際、石が、見えたり触れられたりして己を大きさや色において示すことがあつてこそ、その後で更によく知ろうということが始まる。ただ、このよく、ということの方は当然に定まった道筋に従つてひとりでの順序よく出てくるというものではない。知る側が己との関係において浮かび上がらせるのである。実は大きさをさえ、目で見てわかる、<sup>(イ)</sup> ティードを超えてそれを物差しなどで測つて人が知ろうと思うには、何らかの理由を必要とする。これが更に石の由来を知る、<sup>(ウ)</sup> ジリヨクを持つか知る、何かの薬品で溶けるかどうかを知るなどが問題であるなら、もう、そのような知識の成立が、知ろうとす

る側の人に基<sup>もと</sup>づけられていることは明らかである。そして、対象としての石は向こうに留<sup>とど</sup>まっているから、特定の理由・動機に従って知られたことのすべてを集めても、石についての完全な知識にいつか(エ)トウタツするということはないが、主題を通してこそ、石は石について知ろうとする人に或る姿を見せるのである。

石を投げる武器として使いたい人は、石を割って鋭利な刃物に仕立てたい人とは別のことを知る。石が庭石としての商品価値を持つか、更に利益をもたらし得るかに関心を持つ人が知るべきことはまた別に沢山あり、これはこれで石という対象についての知識の一部を構成することになる。そして、このような事情は実は純然たる学問の場合にも働いている。学者は、その学問の歴史によって規定された主題を通して対象に関わり始めるのが普通である。

主題の働きを明るみに出すことによって、知識を行為に役立てようとする私が、何かについての知識の成立の背後で重要なものとして控えている、というところまではわかった。成立し終えた知識からは、知ろうとしてその知識をもたらした特定の人は消せる。それどころか消すことが知識の客観性の徴<sup>しるし</sup>である。けれども、何らかの理由をもって問う人がいてこそ、特定の価値を持った知ることが生ずる。ところで先に述べたように、哲学では或る何かについて問いつつ、その何かと己との関わりこそを一番の問題にしていく。哲学は知ろうとするこの理由を問題にする。問いそのものに目を向ける。

さて、これまで問いというものを私は或る対象へと向けられるものとして、それについて知ることを求めて発せられるものとして位置づけ、その上で議論してきた。そして行為ないし行為の文脈は、或る対象に関してどのような側面の知識が求められるべきか、それを限定するように働く主題を供給するものとしてのみ話題にした。けれども、問いのもつ日常的な在り方に目を向けよう。C 実は私達の問いの多くは行為そのものへと向けられるのである。或る対象に関する問いを導くものとしての行為そのものの方がまた問われるものたる位置を占め、これが重要なのが私達の生活の実情である。実際、「この花の名前は何?」と聞くような問いよりは——この問いは問いで、今度、花屋さんで買うために名前を知っておきたいという行為の文脈に導かれているが——「どうしよう?」という、何の行為を為<sup>な</sup>そうかについての問い、また或る行為をどのように為そうかについての問いこそが、私達の日常生活で頻繁に提出される問いである。「花屋さんで買っていいな、どうしよう?」「駅前の花屋にしようか、

それとも二丁目の花屋がいいかな」というような問いが実際的な問いである。一体「どうしよう?」という問いなしで生活することが私達に一日たりとあるだろうか。そして、実に「どうしよう?」という日常的な問いは哲学への欲求を隠し持っている。というのも、行為を問うことは行為する自分を問うことへと発展する可能性を持っているからである。可能性でしかないけれども。

普通、日常生活の様々な場面を持ち上がる問いは支えを持っている。それは問う自分自身を問う必要を感じない。私は自明的キ<sup>(オ)</sup>パンの上に立っていて、自分自身をも十分に保持しているからこそ、その自分のために望ましいことを求めて問うのである。「どうしよう?」この石を手に入れるべきか、手に入るとすればどのようになってしまうかと問う人は、戦う者としての自分や商人としての自分を当然のごとく保持した上で、その石の武器としての可能性や商品としての可能性について知り、かつ、そのような側面に関して知られた石との関わりの中で己の具体的行為を問うている。その問いは、自分を戦う者や商人として既に規定し了解していることの表現でこそあれ、その自己了解を問題にするはずがない。そして、このような自己了解は私達の日常性をつくる自明なものの一つ、安定した環境の持続と並ぶ重要な一つである。食事をし眠る家が同じであること、これを私達は当たり前だと思っているが、このような当たり前さと、同じ職場に向向いて決まった仕事をする人間として自分を了解し、そのような職業人として振る舞う、そのような種類の当たり前さとは、日常性をつくる二つの基本的なものである。

しかしながら翻り、行為を選ぶことにおいて、人がささやかなりと自分の在り方を選ぶのであることも間違いない。確かに、石を手に入れるか否かの選択が、自分が商人であるか否かの選択にまで及ぶわけではない。むしろ、諸々の行為の積み重ねは、その人が商人であることをまず自明なことにしてゆく。しかし、時に私の行為の選択が行為者としての私自身の深いところでの選択に直結する場合もある。それまで自明に保持してきた自分を揺り動かすこともないわけではない。そして、そのような種類の選択の前の問いの状況、<sup>D</sup>ここに日常性のうちに潜んでいた哲学の欲求の目覚め、覚醒<sup>かくせい</sup>の余地がある。問う自分自身を巻き込む問い、それゆえに答える自分に関する内容を含むものでなければ答えとして通用しない問い、この問いとともに哲学が生まれる。そして、そのような問いは私が自明性と呼んだものの消失と結びついている。

(松永澄夫「哲学の覚醒」による)

(注) バイキング一号・二号——アメリカが一九七六年、火星に着陸させた探査機。

問 1

傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
～  
5

(ア)

イトナミ

1

- ① 自然の中でエイキを養う。
- ② 宇宙ユウエイを試みる。
- ③ 隣国とのキョウエイをはかる。
- ④ 大寺院をゾウエイする。
- ⑤ エイセイ状態を改善する。

(イ)

テイド

2

- ① 修学旅行のニツテイが決まる。
- ② 上空からテイサツ飛行をする。
- ③ 当事者にチヨウテイ案を示す。
- ④ 問題をテツテイ的に考える。
- ⑤ 平和条約をテイケツする。

(ウ)

ジリヨク

3

- ① 卵はジヨウに富む食品だ。
- ② 両者のルイジ点を探す。
- ③ 白いトウジキを飾る。
- ④ 人々のジモクを驚かす。
- ⑤ イクジ休業を申請する。

(エ)

トウタツ

4

- ① 遠足にスイトウを持参する。
- ② 好機がトウライする。
- ③ ビョウトウに見舞いに行く。
- ④ 朝食にトウフを食べる。
- ⑤ 五重のトウを見学する。

(オ)

キバン

5

- ① サイバンで無罪になる。
- ② ラシンバンで方角を知る。
- ③ バンソウに合わせて歌う。
- ④ ヤバンな行為と非難する。
- ⑤ バンゼンの態勢で臨む。

問2 傍線部A「哲学では事情が違ふ」とあるが、どのように違っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 一般に学問では対象についての知識を得ることが重要であるが、哲学の場合は、それだけでなく対象へのアプローチの仕方をも人々に説得できることが重要である。
- ② 一般に学問では知る側の活動を消去して対象についての知識を得ようとするが、哲学の場合は、自分とのかかわりにおいて問いを立てつつ、一切の対象を問題にする。
- ③ 一般に学問では対象と自分とのかかわり方をより望ましい方向へ持っていくために知識が求められるが、哲学の場合は、自分とは独立したあるがままの知識が求められる。
- ④ 一般に学問では特定の対象と自分とのかかわりを知るために考えたり観察したりするが、哲学の場合は、対象を限定せず自分とかわる一切のものを知るために考えたり観察したりする。
- ⑤ 一般に学問では知ろうとする人の向こう側に知られるべきものがあると考えるが、哲学の場合は、知ろうとする人が自分自身を知ることが目的として問いを立てる。

問 3

傍線部 B「たとえば、一つの石について知るとはどういうことだろうか」以下の二段落で石の例を用いて筆者が述べている内容として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① よく知ろうとする対象が物である限り、人はその対象の側面についての知識しか得られないということ。
- ② 何らかの強い動機を持つてある対象をよく知ろうとする人は、他の対象への関心を持ってなくなるということ。
- ③ 人は知覚によって対象の姿をとらえた後で、その対象をよく知ろうとする動機を持ち始めるということ。
- ④ 特定の関心を持つて対象をよく知ろうとすることで、人はその対象のある姿を知るようになるということ。
- ⑤ ある対象を自分の行為に役立てようとする人は、その対象についての完全な知識を得ようとするということ。

問 4

傍線部 C「実は私達の問いの多くは行為そのものへと向けられるのである」とあるが、「行為そのものへと向けられる」問いの説明として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① ある主題のもとで自分の持っている知識を深めていくためには、どのような行為をしたらよいのかという問い。
- ② ある物の性質について新たな知識を得た結果、それを利用する自分の行為がどのように変化したのかという問い。
- ③ ある対象とかわるとき、自分のために望ましい結果を得るためには、どのような行為をなすべきかという問い。
- ④ 新たに知った知識を生活に生かそうとする行為が、自分にとってどのような意味を持つているのかという問い。
- ⑤ 安定した生活を維持し、自分自身を保持するためには、日ごろどのような行為をなすべきなのかという問い。

問5 傍線部D「ここに日常性のうちに潜んでいた哲学の欲求の目覚め、覚醒の余地がある」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 人がある行為を選ぼうとする時、それまでの疑うことのなかった自分のあり方を考えさせずにはおかない問いの生じる時がある。このような問いが、哲学の欲求を目覚めさせる。
- ② ある行為の選択の結果が、今まで当たり前だと思っていた毎日の生活を大きく変化させ、人を深刻な問いに直面させる時がある。このような問いの中で、哲学の欲求が目覚める。
- ③ ふだんの日常生活の中で、意識するか否かにかかわらず、人は哲学を学びたいという欲求を持っている。どの行為を選ぶべきかという問いを発する時、この欲求は常に目覚めようとしている。
- ④ 日常生活の中である行為を選ぶ時、ささやかであっても人は常に自分のあり方を選択している。したがって、行為を選ぶ問いを立てた時、われわれの中で既に哲学の欲求は目覚めている。
- ⑤ 日常の行為の積み重ねは、われわれの日常性を日々強固なものとしている。そのため、行為から自分に目を移し、自分自身を直接問いはじめるようになった時、哲学の欲求が目覚める。



問 6 本文は問いと問う人との関係を中心に論が展開している。その論の進め方の説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① まず学問のあるべき姿を定義し、ついで一般的学問と哲学との違いを主題の果たす役割から考察し、最後に日常生活における哲学の意義について述べている。
- ② まず学問についての二つの対立した見解を提示し、ついで両者を比較してそれぞれの特徴を明らかにし、最後に哲学と日常生活のかかわりについて述べている。
- ③ まず哲学に対する一般的な見方を批判し、ついで主題の概念から哲学と一般の学問の違いを示し、最後に日常生活の問いに潜む哲学の可能性について述べている。
- ④ まず哲学と一般の学問の違いを示し、ついで問いを成り立たせる主題の概念から哲学の有用性を明らかにし、最後に日常生活における哲学の可能性について述べている。
- ⑤ まず哲学と一般の学問を比較して両者の違いを述べ、ついで主題の概念を導入して論を進め、最後に日常生活における問いが哲学に結びつく場合について論じている。

第2問 次の文章は、梅崎春生の小説「赤帯の話」の後半の一節である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。

(配点 50)

第二次世界大戦の終戦直後、ソ連軍に降服した「私」たちは、中国東北部とソ連との国境近くの收容所に捕虜として送られ、樹木の伐採、氷上清掃などの作業を行っていた。監視役は「赤帯」というあだ名のソ連兵であった。彼はイワノフという名前  
で、彼自身も流刑囚だという噂があつた。ある朝、赤帯は、いつも作業場に向かうのとは違う道に「私」たちを連れて行つた。

樹林の中を通るときは、雪があちこちの梢すずえから落ちる音が繁しげかつた。春が近づいて、雪解けが始まつていることを思わせた。

そして私たちは長いこと歩いた。何度か河を横切つた。同じ河流を何度も何度も横切つたのではなくて、別々の河流のような感じであつた。沿岸の様子や林相の具合から、別な流れだということが判わかつた。アムールもこんな上流の果てになると、細流が

縦横(ア)に錯綜さくそうして流れているらしかつた。ごく狭い細流は、また堅く凍結していたけれども、私たちが渡つたひとつのかなり

広い河流は、その中央部の氷がすでに解けて、音を立てて流れていた。私たちは橋の上からそれを見た。幅三尺ほどの氷の割れ目を、水は生物のようにせせらぎながら、下流へ下流へと流れていた。永い間水にとざされた身にとつてはやはり微かに胸がおどつてくるような眺めであつた。

その河を越えて、すこし山に入つたところに、林のなかにぼつかりと空き地があつて、そこに一軒の小屋が立つていた。それは丸太を組み合わせて作つたような、粗末な小さな小屋であつた。その前で、赤帯の足は止まつた。そして振りむいた。

「いいで昼休みをする。」

肩に食い入るほど重くなつたツルハシなどをおろして、私たちも立ち止まつた。そして赤帯について、小屋のなかに入った。

その小屋は無人であつた。簡単な棚などをこしらえてあつたが、道具類は見当たらなかつた。夏場に獵師が起き臥がするたまりではないか、と私は想像した。そのような小屋は、收容所の近くにもいくつあつて、やはりそのような目的で建てられているら

しかつたから。

赤帯も袋をおろしてそこに休んだ。私たちはその土間に木片をあつめて、火を燃す準備をした。スープをつくるためである。四五時間もぶつづけにあるいたので、私たちはかなり疲れ、眼が廻るほど腹も減っていた。赤帯は床に腰をおろしたまま、だまつて私たちの動作をじつと眺めていた。

火が燃え立つと、私たちは飯盒(注3)をかけ、岩塩と凍ったキャベツを入れ、雪の適当な量を入れた。やがて、それがゴトゴト音をたて始める頃、私たちの手足も、だんだん暖かくなってきた。私たちは足を伸ばしてすこしずつ無駄口などを利き始めた。

腰をおろして黙っていた赤帯が、その時袋を引きよせながら、突然私たちに次のような意味のことを聞いた。

「お前はいま、何が一番食べたいと思うか？」

もちろん単語をいくつか並べただけで、あとは食べる身ぶりであった。やわらかい好奇心が赤帯の顔つきに浮かんでいた。何の連関もなく、いろんな質問をするのが、赤帯の癖であったのだから、私たちも笑いながら、その質問にそれぞれ答えた。私が答えた汽車弁当というのが、赤帯にはすぐ理解できないらしくかった。それはどういう食物かなどと、問い返したりした。皆が答えてしまうと、赤帯は自分のキャンバスの袋の口をひらいて、中から平たい形のものを取り出した。見るとそれは瀬戸引き(注4)の洗面器であった。彼はそれをいきなり私たちの方に差し出しながら、押しつけるような低い声で言った。

「これを分けて、みんなで食べろー」

見るとその洗面器のなかには、大きな黒麵(注5)のかたまりと、大きく切った鮭の切り身が、ぎつしり積み重なって入っていたのである。それは一目見ただけでも、五人かかっても食い切れないほどの量であることが判った。色よくふくらんだ黒麵のそばの、うす赤い鮭の切り身の色が、どのような切ない鮮やかさで私たちの眼を射たことだろう。

私たちは、思わずAこくりと唾をのんで、赤帯の顔をみた。赤帯の顔はすこし赤く血の気をふくんで、頬のあたりにふしぎな微笑をうかべていた。それは慈善者の笑いというより、むしろ含羞(注6)の幽かなわらいであった。

どのような山海の珍味もおそらくはその時の鮭の味には、はるかに及ばなかったと断言できる。私たちはほとんど我を忘れて、台間台間に黒麵麩をかみ、その鮭の切り身をむさぼり食べた。なまの鮭の身が、こんなに美味であるということ、私はその時まで知らなかった。それはつめたい感触とともに、口の中でやわらかくほぐれ、やがて高貴な甘さとなって咽喉へ落ちて行くのであった。その味はおいしいというところを通りこして、ほとんど哀しくなるほどであった。私たちは次から次へ手を伸ばして洗面器の中のもの食べて行った。

赤帯は黒麵麩を千切つて、口に運びながら、れの灰色の眼で私たちの食べる有様を、幽かに笑みをうかべて眺めていた。それは私たちを見ているというより、どこか遠くを眺めている眼付であった。そして時々食べるのを止めて、低声で、もつと食べる、もつと食べる、と手振り私たちをうながした。焚火の上では飯盒がシュンシュンたぎっていたが、誰もそれには振りむかなかつた。いつもなら、咽喉が鳴るほど魅惑的なそのスープも、この鮭の切り身を前にしては、物の数ではなかつた。朝夕のカーシャの中に、ごくまれに、小さな鮭の身が入っていることもあつたが、この鮭の鮮烈な味にはくらべるべくもなかつた。私たちは、餓えた獣のように、一心不乱にわき目もふらずに食べた。もつと食べる、と赤帯がうながすまでもなく。そして何十分かの後、私たちは咽喉の入り口まで鮭をつめこんで、したたか満腹したのである。

私たちは蔑をつけ合いながら、自分たちの満腹をしみじみと確かめた。やつと、人心地がついたという感じであつた。満腹して初めて、今まで腹を減らしつづけていた月日が、実感となつて私にきた。そして私たちに食べさせるために、こんな多量な鮭をかついできた赤帯のことが、しみじみと胸に落ちてきた。

私たちは口々に、赤帯に礼をのべた。そうすると赤帯は急に困惑した表情になつてそんなことは止めろという風に、掌をふつた。

「お前たちは体力が弱いだから」赤帯は手を伸ばして、私たちの身体つきの細っこい輪郭をなぞるようになった。――「早く強くなつて、伐採でもやれるようになるといい。水上清掃などは、一人前の仕事じゃない」それはしみじみとした声であつた。

しばらく休憩して、その日の作業が始まった。作業というのはその小屋から河岸まで、道路をつける仕事であった。道をつけると言っても、すでに道らしい跡があるのだから、そこに横たわった倒木や、垂れ下がった梢をはらうだけでよかった。腹一ぱい食べて元気は出ていたし、仕事も楽だったので作業は非常にはかどった。四時間ほどで、すべては済んだ。

それから朝来た道を逆に、赤帯に引率されて、收容所にもどりついたのは暗くなつた頃であった。いつものように私たちを哨舎(注6)の監視兵にわたし、そして赤帯の猫背のうしろ姿は、私たちを離れて夕闇ゆうやみのむこうに消えて行つた。背中にかついだキャンバスの袋をぶらぶらさせて。――

(注7)カマンジールとしての赤帯を見たのは、これが最後であつた。翌日になつて、私たちには別の新しいソ連兵がカマンジールの任についた。赤帯の姿はどこにも見えなかつた。いつか言つたように、他の收容所へ転属して行つたにちがひなかつた。

B  
―― その時初めて、赤帯が私たちに御馳走ごちそうしてくれた意味が、私たちに判つた。

その後、赤帯には、も一度だけ逢あつたことがある。

その年の夏のことであつた。

私は道路作業をやつていた。体力も相当回復していた。食事の量もすこしずつ増してきたし、雪が解けて以来は、野草や、蛙かえるや蛇などを食べられるようになったから。冬の間にくらべると、胸や腕にずっと肉がついてきた。

その作業場に赤帯がひよっこり姿を見せたのである。

「イワノフ」と私は思わず呼んだ。

赤帯は私を見て、ひどくなつかしそうな表情をした。そして私の方に近づいてきた。

赤帯はすこし痩やせたようであつた。夏負けをしているのであつた。寒さにはあんなに強い赤帯も、夏には脆もろく弱いらしかつた。うすい襯衣シャツから、赤い胸毛をつけた胸がのぞいていたが、思ったほど立派な体格ではなかつた。冬の間は、私たちよりずっと立派な体に思っていたが、厚い服をつけない季節では、思ひの外まずしい身体つきであつた。私などとあまり変わりないよう

に見えた。

「——西へ帰るんだ」

と赤帯が私に言った。その表情や声音に、なにか快活なニュアンスがあるのに、私は氣をとめた。

あれから赤帯は、もっと奥地の収容所に転じ、それから今度、ずっと西の方へ帰ってゆくという話なのであった。その途中で、ちよつとここへ寄つたという訳らしい。

赤帯はその時、しゃれた形の鳥打帽をかぶり、れいのキャンバスの袋をぶら下げていた。

かつての水上清掃班員の(ウ)消息などを聞いたあとで、赤帯は手を伸ばして、私の肩や腕をつついた。

「いい身体になつたな」

そう言いながら、赤帯はからかうような微笑を頬にうかべて、私にいどんだ。

「相撲をとろうか」

昼休みの時間だったので、すこし離れた草原の上で、私たちは相撲をとつた。草原には蚊柱がワンワン立っていたことを、私は覚えてゐる。相撲は、私が一度勝つて一度負けた。赤帯の身には、(注8)巴旦杏はたんきょうのような体臭があつた。

それ以来、私は赤帯にあわない。もう生涯逢うこともないだろう。(注9)しかし内地へ戻ってきた今も、私は時々赤帯のことをなつかしく思い出す。ごく短い接近で、どんな境遇の男かつい知らずに終わったけれども、その印象は今でも鮮やかに私によみがえつてくる。いくぶん小説的な想像を加えれば、あるいは赤帯はやはり流刑囚で、あの時許されて故郷へ帰る途次みちすぢであつたかも知れないとも思ふのである。

そして、あの時食べた鮭ほどに美味な鮭を、内地に戻つてからも、私は未だいま食べたことがない。あの頃よく汽車弁当の夢をみたように、今とどき私には鮭の夢を見る。夢の中のその鮭は、うす荒い断面をみせて、白い瀬戸引きの洗面器のなかに、ぎっしりと積みこまれているのだ。しかしたいいは食べないうちに、眼覚めるのがふつうのようである。

(注)

- 1 林相——樹木の種類や生え方などから見た森林の状態。林の形態。
- 2 三尺——尺は長さの単位。一尺は約三〇センチ。
- 3 飯盒——アルミニウムなどで作った底の深い容器。食糧を入れて携帯し、野外で飯をたくなど炊事にも使う。
- 4 瀬戸引き——鉄製の容器などの内部にガラス質のうわぐすりをかけたもの。瀬戸物に似て見えるのでそう言う。
- 5 カーシャ——粥かゆのような食べ物。
- 6 哨舎——見張り番のいる小屋。
- 7 カマンジール——捕虜たちを監視する人。
- 8 巴旦杏——すもも、あるいはアーモンド。
- 9 内地——当時、植民地などに対して日本の本土を指した語。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 13。

(ア) 錯綜して

11

- ① 激しく音を立てて
- ② 延々と続いて
- ③ 複雑に入り交じって
- ④ 整然と並んで
- ⑤ 曲がりくねって

(イ) 人心地がついた

12

- ① 落ち着いた気持ちになった
- ② 意識が鮮明になった
- ③ 周囲の人たちが気になった
- ④ 快活な気分になった
- ⑤ 人恋しい気持ちになった

(ウ) 消息

13

- ① 勢いのあるなし
- ② 健康状態
- ③ 手紙やはがき
- ④ 仕事ぶり
- ⑤ その後の動静



問2 傍線部A「それは慈善者の笑いというより、むしろ含羞の幽かなわらいであった」とあるが、「私」は赤帯の表情をどのよう

に解釈しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 鮭を夢中で食べる「私」たちへの同情を隠そうとしているというよりも、予期しない親切を受けた「私」たちが感謝して喜んでいることにひそかに満足している。
- ② 空腹に苦しむ「私」たちに食料を恵んだことに満足しているというよりも、監視役と捕虜という立場を超えて好意を示した自らの行為に対して照れている。
- ③ 空腹に苦しむ「私」たちのためにごちそうを用意できたことを誇るというよりも、鮭しか用意できなかった自分のふがいなさに対して恥ずかしさを感じている。
- ④ 空腹の「私」たちが思いがけず食料を与えられて喜ぶ様子に満足しているというよりも、露骨に食欲を示した様子を恥ずかしいこととしてさげすんでいる。
- ⑤ 自分だけが日ごろから十分な食事をとっていることへの負い目を隠すというよりも、「私」たちにも食料を分けることで恥ずかしさから解放されてほっとしている。

問3

傍線部B「その時初めて、赤帯が私たちに御馳走してくれた意味が、私たちに判った」とあるが、「私たち」は赤帯の行為の理由をどのように推測したのか。推測した内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は

15。

- ① 赤帯は他の収容所へ転属するため、別れの気持ちを込めて、空腹にさいなまれていた捕虜である「私たち」に最後に腹一杯食べさせてやりたかった。
- ② 赤帯は他の収容所へ転属することが事前に分かっていたため、親しくなった捕虜である「私たち」に新任のカマンジールよりもよい印象を与えたかった。
- ③ 赤帯は他の収容所へ転属した後は、流刑囚としての罪が許されることが分かっていたため、捕虜である「私たち」に対しても親切にしたかった。
- ④ 赤帯は自分自身も流刑囚であったが、転属して故郷に帰ることができるようになった喜びを、捕虜である「私たち」と一緒に分かち合いたかった。
- ⑤ 赤帯は自分自身も流刑囚であったが、他の収容所に転属する前にたくさん鮭が手に入ったため、捕虜である「私たち」にも分け与える余裕があった。

問 4 波線部「永い間氷にとぎされた身にとってはやはり微かに胸がおどってくるような眺めであった」とあるが、この一文は文章全体の中でとらえたとき、どのような「私」の心情を反映する効果をもたらしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 氷が解けて流れていく春の景色に生まれ故郷の同じような景色を思い起こし、望郷の念が高まり、心が穏やかではなくなった気持ちを反映している。
- ② 水のせせらぎのようなささやかな事柄に対しても季節の移り変わりを敏感に感じ取ってしまうほど、神経がとぎすまされて不安定になった気分を反映している。
- ③ 冬が終わり、春になることをうれしく思いつつも、流れていく水のように行き先が分からないままの自分たちに不安を覚える気持ちを反映している。
- ④ 雪解けの水が流れている様子を見たとき、初めて見る景色にいつもより興奮して、今から起こる出来事に対して期待が高まっていく気持ちを反映している。
- ⑤ 季節が厳しい冬から春に向かうことを喜びつつ、長い収容所生活を送る自分たちの周辺にも何かが起こるのではないかという漠然とした希望を反映している。

問5 本文の中で、「私」と赤帯とのかかわりを描くにあたって、どのような工夫がなされているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 体格があまり立派ではないという赤帯と「私」の身体的な共通点を強調することで、互いをライバルとして意識し合っているという作品内での二人の関係を浮かび上がらせている。
- ② 内地に生還したことが信じられない「私」が、当時の夢を繰り返し見るといふ設定によって、赤帯と過ごした記憶が、次第に夢か現実か判断のつかないものに変質していく経緯が描かれている。
- ③ 赤帯の立場や心情を最後まではつきりさせず、赤帯について「私」の側がさまざまに想像するという表現方法を通して、「私」の赤帯に対する親近感が深まっていく様子が描かれている。
- ④ 「私」が赤帯と言葉を十分に交わすことができなかったため、赤帯についての記憶が曖昧あいまいになっているという設定を通して、相対的に鮭についての印象が鮮やかになるように描かれている。
- ⑤ カマンジールと捕虜という支配・被支配の人間関係が強調して描かれることによって、「私」と赤帯が求め合っていた温かい人間関係が簡単には深まらなかったことが暗示されている。

問 6 この文章における表現や構成の特徴について述べた説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。

ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

18

19

- ① 收容所の捕虜時代の経験が悲惨な飢えに焦点を当てて回想されることにより、「私」にとって忘れ去りたい苦しみに満ちた記憶として生々しく描かれている。
- ② 厳しい收容所生活の中で「私」が感じたかけがえない生の実感が、鮭の冷たい感触、赤帯の巴旦杏のような体臭などの身体感覚と結びついて表現されている。
- ③ 鮭の色や味を「切ない鮮やかさ」「哀しくなるほど」などの感情を示す表現を交えて描くことで、空腹な「私」の食べ物に對するとぎすまされた感覚が表されている。
- ④ 氷に閉ざされた厳冬の場面から雪解けの初春、夏への季節の移り変わりが、こじれた人間関係が修復していく経緯と対応するように描かれている。
- ⑤ 空腹を強いられる状況の中で、腹一杯食べた鮮烈な記憶が、鮭の赤い色・瀬戸引きの白い色という色彩のコントラストを通して鮮やかに描かれている。
- ⑥ 收容所の厳しい生活も、時間を隔てた後の「私」の回想として語られるという作品の構成を通して、一種の懐かしさを伴う思い出として描かれている。

第3問

次の文章は『木幡の時雨』という物語の一節である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

関白の子息「殿の中納言」は初瀬詣での途中、木幡(現在の京都府宇治市。京から初瀬へ向かう途中の地名)で時雨に会い、ある尼の住む家で雨宿りをする。この家には、尼の縁者の姫君が、桜井に住む母のもとを離れて身を寄せていた。美貌の姫君を見初めた中納言は、その夜姫君のもとを訪れ将来の幸せを誓った。しかし、姫君は名前を明かさなない。

時雨はれやらで、三、四日も過ぎゆけば、「なほ誰とか名乗り給へ。尋ね行くべきしにだに」このたまへば、「海人の子に侍れば」と、とひやらぬもことわりにて、「我をば殿の中納言とこそ世人はいふめれ。なほ恐ろしと思し入る。契りといふものは、目に見えぬわざなれば、さりともしまあはれと思しいでなむ」とうちうめきつつ、御傍に添ひ臥して、御枕上なる御笛を手まさぐりにして、傍臥してただならず吹き鳴らし給へるが、いみじうおもしろきを、尼君は、うれしとあはれに聞き居給へり。

やうやう時雨はれゆくほどに、かくて四、五日にもなりぬれば、「初瀬へ参り侍るも、かかることをこそ祈り侍りしか。」(ア)さうらば、かへさには必ずと、契りおきて(1)いで給ひぬ。

中納言いまは参り着き給ひぬと、思しき折ふしに、桜井よりとて、母上御胸をいと大事にわづらひ給ふよし申して、人々御迎へに参りぬれば、いとあわたたしくて(2)渡り給ふべきになりぬるを、姫君は、「時雨の夜の人こそ、かかることありとも知らで、立ち寄り給ふべきに、いひおくこともなくて止みぬるものこそ。待ちかねてもあらばこそ、恨むべき日数も過ぐるは、さる方の心軽さにもなりぬべきを、いつのほどにはひ渡りぬる軽々しきにか」と思ふも、いと恥づかしくつしましければ、尼君もろとも引き具して渡り給ひぬ。

おどろおどろしく(3)わづらひ給へる御胸、夜より少しよろしとて、人々よろこびあへるにも、姫君は、人知れぬ御袖のしづくせきかねて、心苦しき御有様、人々も「さこそ」と、あはれに見奉る。

中納言殿は、急ぎおはして見給へば、人のけしきも見えず、いとあさましく、奥の方にて問はせ給へど、「<sup>(イ)</sup>はかばかしくいらふべき人もなし。ただ、老い痴らへる下衆の卑しき、一人、二人候ふ」と申す。いとあさましく口惜しく、いひおくことなかりけるも<sup>(4)</sup>心幼く、<sup>(注4)</sup>いづくをはかと思ひいつるに、面影はただそのままに御身に添ひたる心地して、さすが二、三日にもなりしかば、いらへなどせし有様、「かかれはやうちとけざりし」と思ふが、あかずかなしければ、

C 思ひきや時雨の宿のひとふしの長き思ひに沈むべしとは

とぞ泣き明かし給ふ。

かくて、ここさへ離れがたくなしければ、<sup>(ウ)</sup>主なき床も懐かしうて、たちとまり給ひぬ。明けぬれば、起きいで給ひて、殿へおはしてもつゆまごころまれ給はず、「<sup>(ウ)</sup>にはひ愛敬ならぶ人あらじはや」と思ひ続けて、いみじう恋しう御涙もよよと泣かれつつ、御枕もうきぬばかりなれば、やをら起きいでて、仏を念じ給ふ、心苦しげなり。

(注) 1 海人の子にし侍れば——名乗るほどの者ではないと、自分の素性を隠して答えている。

2 初瀬——現在の奈良県桜井市東部の谷間にある長谷寺のこと。本尊の観音菩薩は平安時代以来人々の信仰を集め、京からの参詣者・参籠者も多かった。

3 桜井——現在の奈良県桜井市。

4 いづくをはか——どこを自当てに捜せばよいのか、の意。

問 1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20  
22

(ア) さらば、かへさには必ず

20

- ① もうお別れですね、でもあなたを間違ひなく尼君から取り返しますよ
- ② 私が立ち去つても、あなたは私の帰りを絶対に待つていて下さいね
- ③ それでは、初瀬から帰る途中できつと木幡に立ち寄りませよ
- ④ さようなら、初瀬から帰つたら忘れずにお手紙を差し上げませ
- ⑤ それならば、初瀬から歌を贈りますので是非とも返歌を下さい

(イ) はかばかしくいらふべき人もなし

21

- ① わざわざ丁寧にあいさつする必要のある人などいませ
- ② 私たちを馬鹿にして、相手にしてくる人などいませ
- ③ かいがいしく私たちの世話をしてくれそう人もいませ
- ④ しっかりと事情がわかるように返答できる人などいませ
- ⑤ はきはきとした声で応答してくれるような人もいませ

(ウ) にほひ愛敬ならぶ人あらじはや

22

- ① 美しさも愛らしさも、姫君に匹敵するような人はいないだろうよ
- ② 姫君ほど、美しさと愛想のよさがつりあつた人はいないだろうな
- ③ 華やかさや優しさで、姫君に対抗しようとする人はいないだろうに
- ④ 姫君ほど、魅力的な薫りと美貌を兼ね備えている人はいなかつたなあ
- ⑤ 姫君ほど、私の薫物の趣味を愛してくれた人はいなかつたことよ



問 2 波線部①～⑤のうち、二重波線部「目に見えぬわざなれば」の「ぬ」と同じ意味の「ぬ」はどれか。次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 23。

- ① いまは参り着き給ひ<sup>①</sup>ぬと
- ② いひおくこともなくて止み<sup>①</sup>ぬるものにこそ
- ③ 人知れ<sup>②</sup>ぬ御袖のしづくせきかねて
- ④ 明け<sup>①</sup>ぬれば、起きいで給ひて
- ⑤ 御枕もうき<sup>②</sup>ぬばかりなれば

問 3 二重傍線部①～④の主語として、正しい組合せのものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- |  |   |  |   |  |
|--|---|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>⑤ (1) 姫君</li> <li>④ (1) 姫君</li> <li>③ (1) 姫君</li> <li>② (1) 中納言</li> <li>① (1) 中納言</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) いで給ひぬ</li> <li>(2) 渡り給ふべき</li> <li>(3) わづらひ給へる</li> <li>(4) 心幼く</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>(2) 姫君</li> <li>(2) 中納言</li> <li>(3) 尼君</li> <li>(4) 中納言</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>(3) 母上</li> <li>(3) 母上</li> <li>(4) 姫君</li> <li>(4) 中納言</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>(3) 母上</li> <li>(4) 姫君</li> <li>(4) 中納言</li> <li>(4) 中納言</li> </ul> |
|--|---|--|---|--|

問 4

傍線部 A「いつのほどにはひ渡りぬる軽々しきにか」という姫君の心情の説明として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。なお、その直前の「待ちかねても……なりぬべきを」は、「私が尼君の家で待っていてこそ、中納言がこの先戻ってこなかったときに、中納言を恨んで責めることができるのに」という姫君の屈折した恋心を表している。解答番号は

25

- ① 中納言のやってくることを期待し、いついらいしゃるのかと待ちきれなくなっている自分のことを、落ち着きのない女よと、自己嫌悪に陥っている。
- ② 待つ間もなく中納言が尼君の家に戻ってきてしまったので、中納言を責めようとしていた自分の内心が簡単に見透かされてしまうのではと、慌てている。
- ③ 中納言を待ちきれずに自分の方から押しかけると、中納言に、いったいいつの間に来てたのか、軽率な女だと思われそうだとためらっている。
- ④ 自分の方が早々と、中納言を避けて母の家に戻ってしまうので、周囲の皆からは思慮のない女よと、あきれられはしないかと恐れを抱いている。
- ⑤ 自分が尼君の家を離れなくてはならないので、中納言からは、いつの間に姿を消したのか、軽薄な女よと、見下されはしないかと思いついて悩んでいる。

問5 傍線部B「人々も、『さこそは』と、あはれに見奉る」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① お付きの人々も、母上の苦しそうな様子を、「もう死期が近づいているからであろう」と、しみじみと無常を感じながら拝見する。
- ② お付きの人々も、母上の苦しそうな様子を、「姫君がこっそり泣いていらっしやるのが目に入ったからであろう」と、痛々しい思いで拝見する。
- ③ お付きの人々も、姫君のつらそうな様子を、「ずっと中納言様のごことが気にかかっていらっしやるのだらう」と、気の毒に思いながら拝見する。
- ④ お付きの人々も、姫君のつらそうな様子を、「母上の病状が持ち直したので、はやく木幡に戻りたいのだらう」と、薄情さに驚きながら拝見する。
- ⑤ お付きの人々も、姫君のつらそうな様子を、「中納言様との仲を母上に気づかれないかと恐れていらっしやるのだらう」と、心配しながら拝見する。

問 6 傍線部 C の和歌を詠んだ中納言の心情の説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

27

- ① 時雨の夜に姫君のために笛を演奏して心が一つになった瞬間には、今日のようなつらく悲しい状況になるとは予想もできなかったと、姫君の不在を裏切りと感じて茫然ぼうぜんとしている。
- ② 時雨の夜に笛を吹いて傍らにいた姫君を感動させた思い出が、姫君と会えない今の悲しみと結びつかず、将来まで続く寂しさが思い合わされ、気持ちの整理がつかずにいる。
- ③ 時雨の夜に姫君のために奏でた笛の音の思い出を胸に、姫君の突然の失跡を受け入れ、悲しみながらもこれからの孤独な日々を生きていこうと、涙ながらに決心している。
- ④ 時雨の夜に姫君に笛を聴かせた仮寝の思い出のために、姫君と会えなくなったつらさが一層身にしみ、姫君の態度が曖昧あいまいだった理由にも思い至り、悲しみが増している。
- ⑤ 時雨の夜の仮寝に笛の演奏をきっかけとして姫君とも打ち解けたことが、かえって悲しく思い出されて、無断で帰宅した姫君が恨めしく、将来を絶望して嘆きに沈んでいる。

第4問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で返り点と送り仮名を省いたところがある。)

(配点 50)

楊光遠(注1)之の叛(はん)青州(せう)也や、有(リテ)孫中舍(注2)居(ル)城中(ちゆう)。族(注3)人在(リ)州西(しゆう)別墅(注4)。城閉(ヂテ)既久(シク)、内外隔絶(ア)、食且(ニ)尽(キント)、举族(ア)愁嘆(ス)。有(リテ)畜犬(注5)、徬徨(くわうしやう)其側(かたはら)。若(シ)有(ルガ)憂思(ゆうし)、中舍(注6)因(リテ)嘱曰(ハク)、「爾能(ク)為(ニ)我至(リ)莊取(ラシ)米邪(カト)。」犬搖(ラシテ)尾、心之(ニ)至(リ)夜、為(ニ)置(キ)一布囊(注7)、并(アハ)簡繫(ツナ)犬背上(ニ)。犬即(チ)由(ヨリ)水竇(すいとう)出(デ)至(リ)莊、鳴吠(ほユ)。居者開(ケ)門(ヲ)、識(リ)其犬(ヲ)、取(リテ)簡視(シ)之(ヲ)、令負米還投(ト)。曉入城(シ)。如此(キコトク)数月(ごうほひ)、比至(ル)城開(クニ)、孫氏(注8)闔門(もん)数十口、独得(ル)不餒(ラフ)。

(王闡之『澠水燕談錄』による)

(注) 1 楊光遠——人名。このとき、五代の後晋王朝にそむき、青州のまちを占拠していた。

2 孫中舍——人名。後晋王朝に仕える青州の役人。 3 族人——親戚。

4 別墅——別荘。莊園。 5 徬徨——歩き回る。 6 莊——別墅に同じ。

7 布囊——布の袋。

8 闔門——一家全員。

①

29	簡
----	---

---

⑤	④	③	②	①
書	繁	簡	簡	簡
簡	簡	便	潔	略

②

28	挙
----	---

---

⑤	④	③	②	①
快	選	挙	挙	挙
挙	挙	手	国	動

問 1 二重傍線部②「挙」・①「簡」と同じ意味の「挙」「簡」を含む熟語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

28	・	29
----	---	----

。

問 2

波線部(ア)「食且<sub>レ</sub>尽<sub>キント</sub>」・(イ)「即<sub>チ</sub>由<sub>リ</sub>水<sub>ヲ</sub>寶<sub>ト</sub>出<sub>デ</sub>」の解釈として最も適當なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

30

31

(ア) 「食且<sub>レ</sub>尽<sub>キント</sub>」

30

- ① 食糧の補給がしばらく途絶えたために
- ② 食糧はまだまだ十分あるはずだと思い
- ③ 食糧でさえ極めてとぼしい事態なので
- ④ 食糧がいよいよ無くなりそうになって
- ⑤ 食糧がもしも絶たれてしまったならば

(イ) 「即<sub>チ</sub>由<sub>リ</sub>水<sub>ヲ</sub>寶<sub>ト</sub>出<sub>デ</sub>」

31

- ① ようやく水路をくぐり抜け
- ② 一目散に水路へと駆け出し
- ③ からも水路にたどり着き
- ④ 何度も水路伝いに逃げ切り
- ⑤ すぐさま水路から抜け出し

問3 傍線部A「中舎リテ因タミテ囑ハク」とあるが、孫中舎は飼い犬に何をさせようとしたのか。その内容として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 城外との連絡を絶たれた孫中舎たちを救うため、別荘から食糧を運んで来ること。
- ② 城外との連絡を絶たれた孫中舎たちを逃がすため、別荘から武器を盗み出すこと。
- ③ 青州のまちを占拠した楊光遠と和睦わぼくするため、別荘から金品を運び込ませること。
- ④ 青州のまちを占拠した楊光遠を苦しめるため、敵陣にある食糧を盗み出すこと。
- ⑤ 青州のまちを占拠した楊光遠に抵抗するため、敵陣から武器を盗んで来ること。

問4 傍線部B「令負米還投暁入城」は、「米を負ひて還り暁に投りて城に入らしむ」と読む。どのように返り点をつけるのがよいか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 令<sub>ミ</sub>負<sub>レ</sub>米 還 投<sub>レ</sub>暁 入<sub>レ</sub>城
- ② 令<sub>ニ</sub>負<sub>レ</sub>米 還 投<sub>レ</sub>暁 入<sub>レ</sub>城
- ③ 令<sub>ミ</sub>負<sub>レ</sub>米 還<sub>ニ</sub>投<sub>レ</sub>暁 入<sub>レ</sub>城
- ④ 令<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>米 還<sub>レ</sub>投<sub>レ</sub>暁 入<sub>レ</sub>城
- ⑤ 令<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>米 還 投<sub>レ</sub>暁 入<sub>レ</sub>城



問5 傍線部C「孫氏かぶ闔門かど數十口独得ひとり不餒ルヲウエ」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 34。

- ① 孫中舎の一家数十人のうち、誰だれひとり最後まで生き残った者は無かった。
- ② 孫中舎の一家数十人のうち、結局ひとりだけが飢え死にせずに済んだ。
- ③ 孫中舎の一家数十人だけは、城内でかろうじて飢えに苦しまずに済んだ。
- ④ 孫中舎の一家のみならず、城内では誰ひとり飢えに苦しむ者は無かった。
- ⑤ 孫中舎の一家のほか、わずか数十家族だけが、飢え死にせずに済んだ。

問6 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 州の西郊外の別荘に住み着いていた犬が、孫中舎一家を助けるため、何か月もかかって主人のもとに走った。
- ② 孫中舎の飼っていた犬は、主人を励まそうと、けなげに尾を振り、夜には忍び込んできた敵に吠えかかった。
- ③ 飼い犬を見知っていた者は、ただちに孫中舎の窮状を理解したが、結局は犬を敵陣へと追い返してしまった。
- ④ 反乱が終息して城門が開くまでの間、飼い犬は、青州のまちと州の西郊外の別荘との間を何度も行き来した。
- ⑤ 一晚中走り続けた飼い犬の美談は、孫中舎の親戚たちにもいち早く伝えられ、彼らをしみじみと感動させた。